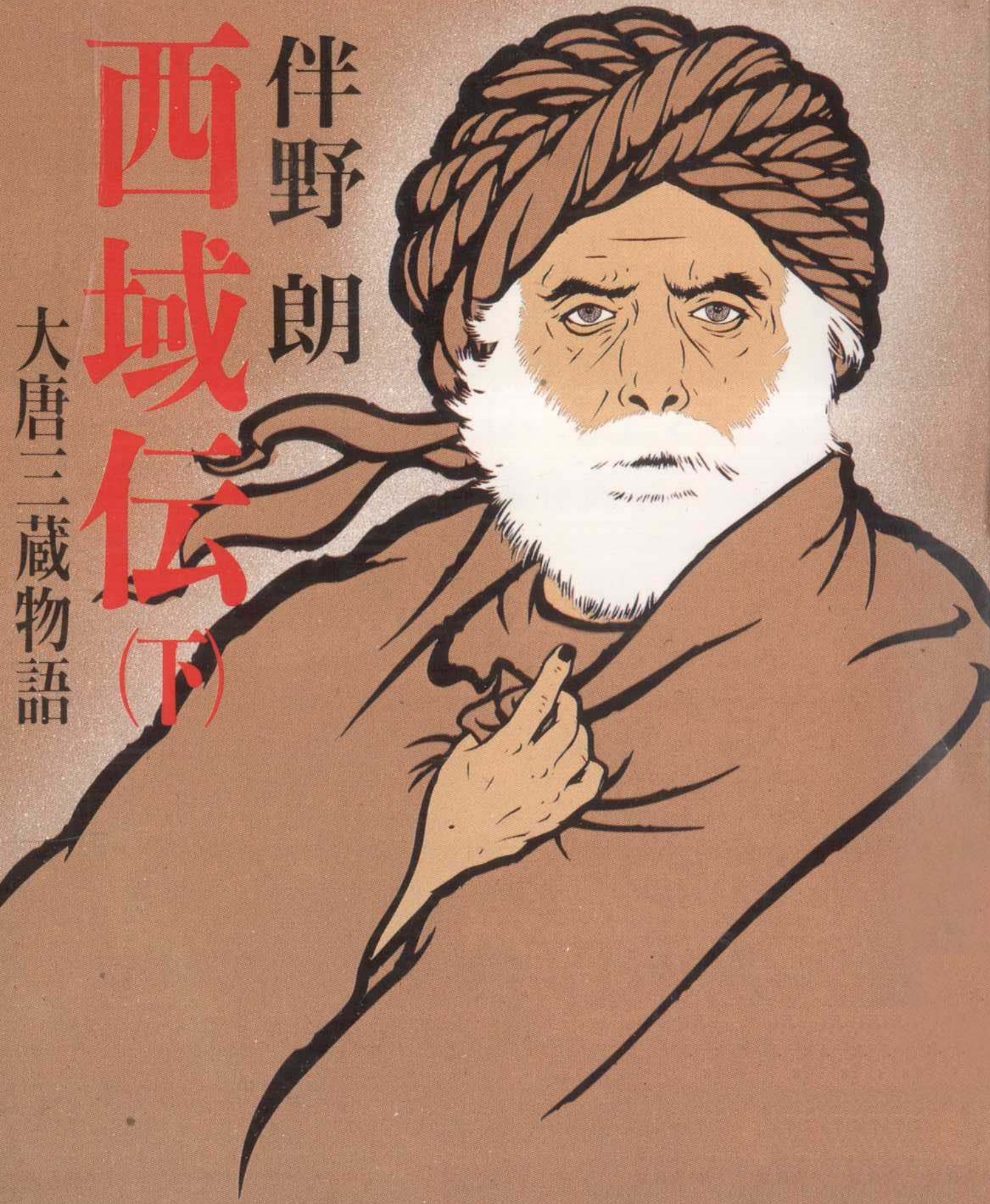


伴野朗

西域伝
(下)

大唐三蔵物語



集英社文庫



さいいきでん だいとうさんぞうものかり
西域伝——大唐三蔵物語(下巻)

1990年7月25日 第1刷

定価はカバーに表示してあります。

1990年8月31日 第2刷

著者 とも の ろう
伴 野 朗

発行者 若 菜 正

発行所 株式 集 英 社
会社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10
〒101-50

(230) 6100 (編集)

電話 東京 (230) 6393 (販売)

(230) 6080 (製作)

印刷 凸版印刷株式会社

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

江苏工业学院图书馆

集美社文庫

藏書章(下)

大唐三藏物語

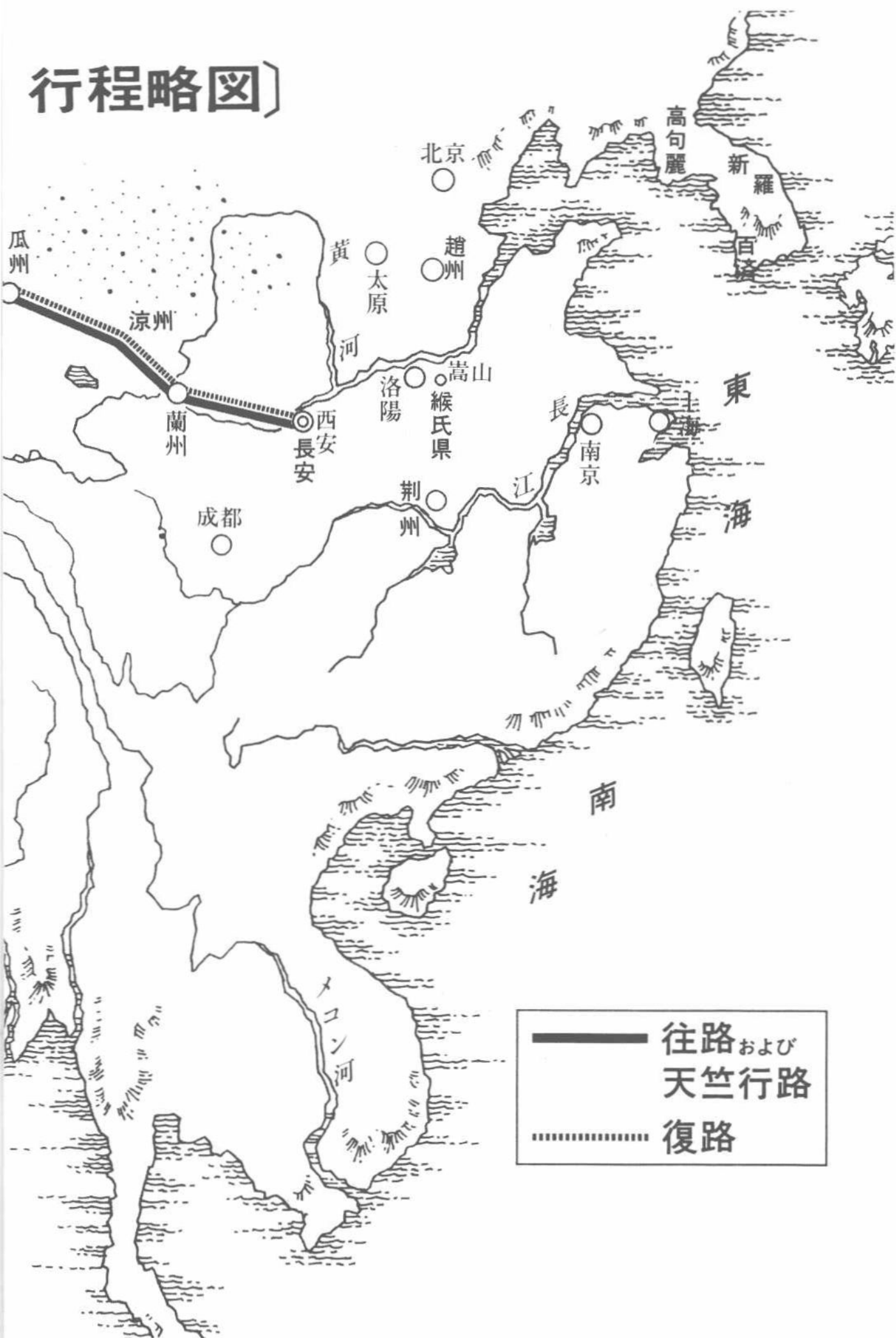
伴野朗

目次(下卷)

難	関	(承前)	八
犧	牲		三四
砂	漠		七九
火	焰		一七
氷	河		一四八
邂	逅		一八七
雷	神		二三九
天	竺		二八〇
昇	華		三三〇
三	蔵		三七二
エピローグ			四〇三

解説 志水辰夫

行程略図]



地図

さがら常廣

西域傳——大唐三藏物語 下卷

難 関 (承前)

3

玄奘は、涼州都督府で李大亮と相對していた。

「そなたの高名は、それがしもよく存じておる」

李大亮は、まずそう切り出した。玄奘は、澄んだ眼でじつと涼州都督の顔を見詰めている。

「正直に答えて貰いたい。よいか、法師殿——」

「はい」

玄奘は、まったく屈託がない。

「これより、いづくに参られるおつもりか？」

「求法のため、天竺に参ります——」

きっぱりと、彼はいった。

「天竺へ……。わが国は私的な出国を禁じておる。そのことは承知か？」

「はい、存じております」

「では、いかなる手続を経て、出国の許可をとられたのか？」

「再三出国の許可を求め願書を出しましたが、お取り上げ下さいませんでした。故に許可は受けておりません。ですが、これは仏法のためです。苦しみ、悩める衆生しゅじやうを救わんがための求法でございます」

玄奘は、力強くそういい切った。

「仏法のためとはいえ、それでは国禁を犯すことになるぞ」

李大亮は、初めて少しだけ声を荒げた。

「やむを得ない、と思っております」

「玄奘殿、それがしのもとに、そなたを見つけ次第、捕えて身柄を長安に送り返せ、という長安からの連絡が入っております」

「じゃが、それがしは、そなたに縄を打ちたくはない。ここは一つ聞き分けて、自分から長安に戻ってはくれまいか」

「ありがたいお言葉ではありますが、私はどうしても天竺に参る覚悟しております」

「そうなれば、縄を打つことになるぞ」

「いたしかたありません」

「きょうのところは、このくらいにしておこう。二、三日よく考えてくれぬか。そなたほどの人物なら、この道理はよくわかる筈だがのう」

李大亮は、毛定もうじやうが嫌いであった。玄奘の逮捕に積極的でない理由が、それであった。

李大亮は、京兆涇陽けいちやうけいやうの人。高祖に仕えて武功をたて、交州刺史しやうしから涼州都督に転じた。

以前に、彼の部下に毛定の甥に当たる男がおり、その処遇をめぐって、宦官一流の陰険な報復を受けたことがあった。それに彼自身、どちらかというところ、武人タイプであり、宮廷政治に権謀術数を駆使する毛定ら宦官グループとは、まったく違った肌合いの人物であった。また仏教に深く帰依しており、玄奘に心情的には同情していた。さりとして、太宗側近の毛定に正面切って楯を突くこともできない立場にあった。

——なんとか、よい思案はないものか？

玄奘を帰したあと、李大亮は自室にこもって、そのことを考えていた。

どう理由があっても、都督たる者が、国禁を犯す行為をみすみす見逃すわけにもいかない。——玄奘をなんとか思いとどまらすことはできないだろうか。

茶を喫してから、彼は腕を組み直した。当然のことだが、この件で自分が怪我をするつもりはない。

——なにかよい考えはないものか。

彼は、思案にくれていた。

「どうじゃ。引き受けてくれるか——」

そういったのは、黄鬼である。涼州の場末の一杯呑み屋である。豚の足を齧っていた男が、床へ骨だけになった足を放り投げた。漢人ではない。明らかに胡人である。紫髯碧眼、大柄でガッシリした躰つきをしていた。黄鬼と遜色のない体格である。

「のう、石槃陀。昔のよしみじゃ。やってくれよ」

黄鬼は、石槃陀と呼んだ男の湯呑みに、なみなみと酒を注いだ。

石姓を名乗るところをみると、石国の出身であろうか。石国とは、いまのソ連のウズベク共和国の首都タシケント一帯である。アーリヤ系の民族が住んでいた。

「その坊主を叩き殺せばよいのか？」

石槃陀は、無雑作にいった。手には、新しい豚の足を持っている。

「やってくれるか！」

「条件が一つある——」

「なんだ。いってみろ」

「俺にも、奴の肉を食わせるのだ」

「どうした、黄鬼道人——」

石国人は、からかうようにいった。黄鬼は返答に窮していたが、前の湯呑みの酒を一気に干してからいった。

「そこまでわかっているなら仕方がない。お前の条件を呑もう」

「ほう、承知したか。で、その坊主にどんなご利益りやくがある？」

「生まれた時、仏の子といわれた。不老長生間違いなしじゃよ」

「なるほど」

「当時は、居士こじさまも随分とご執心であつたげな」

「ほう、居士さまがな」

「いま、長安で、釈門の千里の駒」とうたわれておる」

「食い甲斐がありそうじゃな……」

「バカ。いまから涎よだれをたらすでない」

「ははは……。ついその気になってしもうたわい」

「で、手筈は？」

「まあ、俺に任せておけ。それよりも、きょう長安から都督府に急使が届いた」

「やはり、長安からの急使か」

「知っておったか」

「わしらの前を駆け抜けていきよったわ。で、なんの知らせじゃ」

「その坊主を見つけ次第、引くくくって長安に送れと行ってきたそうな」

「相変らずの早耳じゃが、それはちと困ったのう」

「その心配は、少林寺の坊主どもにさせておけばよいわ。奴らがなんとか手を打つであろうよ」

石槃陀が、豚の足の肉を食いちぎりながらいった。

この男、鬼道門にかつていたことがある。青鬼せいきと同格だったから、黄鬼は弟弟子ということになる。大男のくせに蝶のような軽やかな身のこなしをする。闇のなかでも、眼が利くという特技の持主でもある。

「さあ、もう一杯、ぐっとあけてくれ——」

黄鬼が、なみなみと注ぎ足した白酒を、石槃陀は、水のように呑み干した。

彼らが話している後ろの席で、一人で杯を傾けている隻腕せきわんの男がいることに、二人はまったく気づいていなかった。

黄鬼道人と、その連れの石国人、石槃陀が去ってからも、その隻腕の男は、居酒屋の固い樽の上に腰をおろしたままだった。

——斬るか。

男は、口のなかでそう呟いた。李翔りしやうである。早馬を飛ばして、玄奘たちよりも一足先に涼州に入った。だが、本来の目的である涼州都督府を訪れることなく、街に出ていた。長安から来た高僧の噂を聞かためである。玄奘が涼州に着いたことはすぐにわかった。だが、いまだどこにいるかがわからなかった。最後に足を入れた場末の居酒屋で、彼は容易ならざる陰謀を耳にしたのだった。

二人が話題にしていたのが、玄奘であることは間違いなかった。智相ちさうに聞いた、——釈門の千里の駒。

——という表現が使われていた。

——玄奘の命にかかわるかも知れぬ、という智相の予感当たったことになる。

彼は、杯に残った白酒を、喉に流し込んだ。とにかく間に合った。玄奘の無事を確認することが、まず第一だ。あの二人は、必ず玄奘を襲うに違いない。

鳥目ちようもくを台の上に置くと、李翔は立ち上った。玄奘と洛陽で会ったのが、ついきのうのことのように思われた。

漆黒の闇が、辺りを包んでいた。

大雲寺は、闇のなかにひっそりと建っていた。暗闇のなかで声がした。

「この暗さでは、霧はいるまい——」

音程のはずれた声は、黄鬼のものであった。

「不要じゃ」

短くそういい切ったのは、石槃陀である。

「塀を乗り越えねばならんぞ。手を貸してやろう」

黄鬼は、そういうと、手を組んでその上に石槃陀の足を乗せた。石槃陀が、伸び上った。

手は、塀の屋根に届かない。

「もっと持ち上げてくれい」

「わかった——」

黄鬼が力んだ。たいした力である。巨漢の石槃陀の躰をじりじりと持ち上げていく。

「よし、手が届いたぞ！」

石槃陀が、そう声を出した時だった。

「覚悟しろ、化物ども！」

どこからともなく、低い声がした。

「なにやつ？」

黄鬼が、闇を凝視した。身近にかすかではあるが、人の気配がした。それまで、気配を消

していたのだ。戦慄が、黄鬼の全身を走った。その一事だけで容易ならざる敵であることがわかる。いま斬り込まれたら、彼には防ぐ術すべがない。両手は、石槃陀を乗せて自由が利かない。

石槃陀も、一瞬にして不利な状況を読み取っていた。ここは、黄鬼の両手を自由にしてやるしかない。彼は、黄鬼の組んだ掌を蹴ると、塀の屋根の上に立った。

その時だった。白刃が電光のように黄鬼を襲って来たのは。間一髪のところ、黄鬼は闇のなかから送り出されてきた必殺の先制攻撃を躲かした。頬に冷たい感触があった。皮膚の一部を斬り裂かれたらしいが、そんなことに構っている暇はなかった。

すぐさま、二の太刀が襲って来た。恐ろしく正確な軌道を描いて、鋼の凶器が彼の頭上に迫った。反転したが、遅かった。右腕をしたたかに斬られた。

「うぬ！」

黄鬼は、なんとか有利な姿勢を確保しようとした。それができれば、霧を呼ぶことができ。そうすれば、霧にまぎれてこの窮地から脱することも不可能ではない。

だが、襲撃者は、その余裕を与えてくれなかった。三の太刀は、誤たず彼の頭に振りおろされていた。辛うじて彼は、避けた。ただ、左耳を削ぎ取られ、鮮血が吹き出していた。

彼は、構わず反転した。何万分の一かの逆転の可能性を、彼はまだ考えていた。

だが、それは彼の考えだけで終わった。次に襲ってきた白刃は、彼の生命力を奪うに十分な一撃を、その首筋に加えていた。